西光 第184号

令和2年10月30日発行

浄土宗西山禅林寺派
雲龍山 西光寺
住職 大塚靈閑
〒671-0101
姫路市大塩町229
Tel 079-254-0351
Fax 079-254-4142

お十夜法要のご案内

靈閑だより

気になる・・・
「枕飾り」のギモン

門前掲示板より
手は合わせるものではない　手は合わさるもの

お知らせ

お十夜法要

11月21日（土）13:30～15:00

※開始・終了時間が例年と違いますのでご注意下さい。
塔婆廻向は致しません。予めご了承下さい。

■ 13:30～お勤め

■ 14:00～お説教【京都 恵光寺住職　岸野 亮淳（りょうじゅん）師】

お十夜法要にお参りの皆様へ

この度のお十夜法要は時間を短縮し、実施致します。社会を見渡しても、完全な自粛の段階から、withコロナの段階に既に入っております。もちろんコロナへの不安は依然としてありますが、3密を避けるなど基本的なコロナ対策に十分留意しながら法要を勤めて参ります。

お参りにお越し下さる皆様には、マスクの着用、本堂出入口での消毒のご協力をお願い致します。寒い時期になって参りますが、適宜換気をしますので、防寒対策もお願いします。またお十夜名物の豆ご飯は、世情を鑑みて提供は控えさせて頂きます。予めご了承下さい。

皆様と一緒に御詠歌をあげご先祖の供養をしております塔婆廻向につきましては、受付時の接触機会を回避し、皆様の本堂での滞在時間を減らすことを最優先とし、この度は中止させて頂きます。何卒ご理解の程宜しくお願い申し上げます。

この度の説教師にはお説教の大家であります京都　恵光寺の岸野亮淳師をお招きしております。いつも笑いあり、涙ありの素晴らしいお説教をお聞かせ頂いております。閉塞感漂う世の中に、きっと明るい光を灯して頂けるものと思います。

何かとご不便をおかけ致しますが、お誘い合わせてお参り下されば幸いに存じます。

合掌

靈閑だより

書類の整理をしていたら、おもしろい詩の切り抜きを見つけました。

四十や　　深井ゆうじん

知らんあいだに
四十や
びっくりするで
四十や
人生半分過ぎてもた
二十歳を二回
やってもた
なんやかんやで
四十や
なんにもせんでも
四十や
生きてるだけで
四十や
生きつづけてたら
四十や

この四十のところにご自分の年齢を当てはめてみてください。私も三十七歳ですので、この詩の作者と同じ状況を迎えようとしています。「四十か～ええ歳なってもたな」という感覚ですが、「四十？何をまだまだ、若い若い！」と怒られそうです。

歳をとると一年が早いと聞きます。いや一日も早いと言います。私も早いなと思っているので、それ以上に早くお感じになっておられるのでしょう。先の詩ではないですが、この時期になって振り返れば、「早いな～もう一年たってもた、知らんあいだにたってもた、何もせんでも一年や、なんやかんや一年早いな～」という感じでしょうか。

「日没無常偈（にちもつむじょうげ）」というお経があります。夕刻の時に命の無常を説く詩を聴いて欲しいと始まります。このお経の中では、人間の寿命をロウソクの灯に例えています。風の吹く中に置いたロウソクの火は常にゆらゆらとして、いつ消えてもおかしくない状態です。このような見ていてハラハラする気の休まらない世界から抜け出ようではないかと言っています。時だけが過ぎ、寿命というロウソクは刻一刻と短くなっていっていることに気づかぬのだと。無常というのは、常が無いと書きます。永遠なるものなどなく、全てのものは移ろう、変化してゆく。ロウソクも一時たりとも同じ形、同じ長さではありません。夏場のお参りの際、扇風機の風を常に受けながらも、それに耐え、芸術作品の如く、すごい形になりながらも、お経を詠んでいる間一度も消えることなく持ちこたえるのに成功したロウソクの火を見ていると、拍手喝采を送りたくなります。話が逸れました。つまりロウソクの火のように、私たちの人生というのは死と隣り合わせということがいえます。ですので、この「日没無常偈」に「強健有力時自策自励」とあるように、まだ身体が動き、気概もある内に、自らむちうち、自らを励まし、毎日精一杯生きていきましょう。京ことばでいうところの「どうぞおきばりやす」ということでしょうか。

歌人の斎藤史（ふみ）さんの歌にこうあります。

おいとまを いただきますと戸をしめて
出てゆくやうにゆかぬなり生は

仏さまはいつお迎えに来られるか分かりません。どうにもならぬ「死に方」を考えるのではなく、死ぬまでの「生き方」を考えたいものです。

気になる・・・「枕飾り」のギモン

気になる…シリーズ、今回も枕経（まくらきょう）です。その中でも枕飾（まくらかざ）りについてです。亡くなってから通夜まで安置された故人の枕元に机を用意し、様々なお供えをします。これを総称して枕飾りといいます。今では葬儀社が全て用意しますので、自分たちが用意するものは特にありません。しかし、一つ一つのお供えに故人への思いが込められていますので、「へぇ～」と思って頂ければ幸いです。

花は花でも咲いた花ではなく

まずは仏壇でもそうですが、香炉（こうろ）・ロウソク・花の三点セット（三具足（みつぐそく））がないと始まりません。ただし、普段と違うのは花といっても色とりどりの綺麗な花ではなく、樒（しきみ）（シキビ）などの花の咲いていない一本花という点です。そして花立ての中に水は入れません。二度と不幸のないようにという願いも込められているようですが、その毒性と強い香りでもって、死臭を隠し、獣や悪霊から故人を守るという意味もあります。かつて土葬の時代には動物に遺体を荒らされるのを防ぐために、墓に樒を置いたといいます。その名残で今でもお墓参りによく使われます。

香を焚くことに意義あり

線香に関して、普段でもそうですが、特に本数は重要ではありません。香を焚くことに意義があります。とはいってもそれでは困ってしまうので、強いて言えば四十九日の間は一本です。それは極楽浄土への道がいくつもできては故人が迷うからということのようです。へぇ～というくらいでいいと思います。今は渦巻き線香やキャンドルタイプのロウソクなど、度々

替えなくても長時間もつ便利なものがありますので、それでもよいでしょう。仏壇でも香炉がお祀りの中心にくることからも分かるように、香を焚き香りを捧げることが一番の供養になります。今は難しいですが、かつては四十九日の間はロウソクや線香を絶やさないようにと、誰かがその番をしていたのはそのためです。

代用はできます

右記の三具足が揃っていれば最低限の準備はよいのですが、お供えものも用意したいものです。まずはお水。四十九日が明けるまでは何でも仮のものということで、葬儀社が用意されるものは全て白木のものや陶器も白いものを使いますが、生前故人が使っていた湯呑みでも構いません。枕飾りをする机も、白木の机でなくても家にある小机や台に白い布をかけて使っても問題ありません。香炉、ロウソク立て、花立ても同様に仏壇で普段使っているものでも問題はありません。

山盛りの白米は贅沢の極み

次は枕飯（まくらめし）（一膳飯（いちぜんめし））です。一合お米を炊いて、その全部を生前故人が普段使っていた茶碗に山盛りにして、箸を立てます。一合炊いて全部盛るのは「同じ釜の飯は食わぬ」とのこと。かつては白米を炊いて山盛り食べるなんてことは贅沢の極みだったことでしょう。故人のために最後は贅沢にお供えしてあげたいと思う気持ちの表れにほかなりません。そしてご飯に立てる箸は高さを違えて高低差を作り立てます。これは仏の慈悲と智慧を表すとされます。子供の時など、ご飯の最中にご飯に箸を突きさしていたら、「そんなことしたらアカン」と怒られた方も多いのではないでしょうか。これは亡くなった人へのご飯のお供えがそうであるように、死を連想させるからということになります。

六という数字はどこからきている？

次に枕団子（まくらだんご）です。浄土の教えでは四十九日の間、霊が彷徨うというようなことはないのですが、昔からお浄土への長旅の食糧として団子をお供えします。数は六個が多いようです。この六は六道輪廻（ろくどうりんね）の六で、地獄・餓鬼・畜生・(阿)（あ）修羅（しゅら）・人間・天という六つの世界を、輪廻、つまりぐるぐるさまよいまわっているということです。地獄・餓鬼・畜生・修羅までは何となくキビシイ世界なのは分かります。しかし六道の中で最も良い、神々が住む天の世界もやはり寿命や苦しみがある世界なのです。ですので仏教の立場はこの苦しみ続ける六道輪廻の世界から脱して、苦しみのない悟りの世界、つまり極楽浄土に生まれようと説きます。極楽の反対が地獄と思われがちですが、正確には極楽の反対は六道なのでしょう。枕経の段階では、まだ葬儀の前で、この六道を脱していないということで六個のお団子をお供えすることが多いようです。

以上、枕飾りについてみてきました。お供えもの一つ一つが故人を思ってのことで、極楽往生の願いが込められています。葬儀全体が簡素化されてきている中ではありますが、昔から綿々と続いてきた先人たちの知恵の結晶を大事にしつつ、故人を送り届けたいものです。

門前掲示板より

八月

戒香薫習

良い香りが自然に

薫ってくるような人になりたい

九月

多少の利であれば

気持ちよく

他人にゆずってみる

十月

一日に一度は人を褒める

または感謝の気持ちを伝える

兵庫県多可町

「一日ひと褒め条例」条文より

十一月

手は合わせるものではない

手は合わさるもの

手は合わせるものではない
手は合わさるもの

もう何年も前のことです。葬儀を終え、斎場（火葬場）に行くため霊柩車の後を車で走っていた時のことです。こちらに向かって歩いて来ていたご婦人が、ふと足を止めて霊柩車が前を通り過ぎる際、手を合わせ、頭を下げて霊柩車を見送られていたのです。たまたますれ違っただけですので、自分に縁のある人でもないでしょう。私はそのなんとも自然な所作が大変印象深く記憶に残っています。手は合わせるものではない、手は合わさるものなのだと。

大塩には平成六年に廃止となるまで姫路市内でも最後まで斎場が残っていました。自宅から出棺し、斎場まで野辺送りをするという風景が、ほんの二十年前くらいまでは、日常的に見られました。ある意味死が身近にあったといえます。先のご婦人も霊柩車を見ると、昔そうしていたように自然と手を合わせ頭を下げていたのでしょう。

本堂の南側に合祀墓があります。そこに納骨された方の戒名、俗名、没年月日が刻まれた石のプレートが並んでいます。もう百名以上の方がお入りになっています。そのプレートをひとしきり眺め、「〇〇さんもここにお入りになってらっしゃるんですね、昔よく遊びました」と手を合わせて帰られた方がいらっしゃいました。それ以来自分の家の墓参りを終えた後に合祀墓へも手を合わせてからお帰りになっています。お墓の最大の意義がここにあるように思います。人知れず手を合わせることができる。家へお邪魔して仏壇に線香をあげさせてもらう、手を合わせに行くというのはなかなか出来ませんが、墓へはいくらでもできます。故人は決して家族だけのものではありません。

令和三年度年忌表

来年は左記の年にお亡くなりになられた方の年忌法要（法事）があたってきます。特に土・日曜日の午前中をご希望の方は、早めに日時をご予約下さい。年忌があたっておられる方には別紙にてご案内いたしますが、念のため、左記の年忌表をご覧になってご確認下さい。

一周忌	令和二年没
三回忌	平成三十一年没
	令和元年没
七回忌	平成二十七年没
十三回忌	平成二十一年没
十七回忌	平成十七年没
二十五回忌	平成九年没
三十三回忌	昭和六十四年没
	平成元年没
五十回忌	昭和四十七年没

西光寺役員の去就

【退任】中ノ丁世話人

熊野和代さん

熊野和代さんは、平成十年の秋のお彼岸より中ノ丁の世話人として、当山の護持運営にご尽力頂きました。なんでもお任せできる頼もしい存在でありましたので、残念なことではありますが、この度ご退任されることになりました。長年に渡りお世話を頂き、誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

【就任】中ノ丁世話人

高瀬かよ子さん

熊野和代さんの後任として、中ノ丁の世話人に高瀬かよ子さんにご就任頂くことになりました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

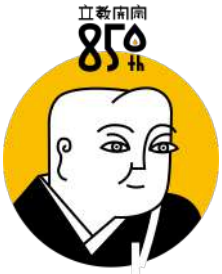
【ご逝去の報】

生前の温顔を偲びつつ、お十念を捧げます。

大阪	藤本里子さん(87歳)	7月20日没
北脇	熊野静代さん(96歳)	8月2日没
中ノ丁	梶原淳さん(88歳)	8月5日没
西ノ丁	梶原武信さん(88歳)	8月11日没
西ノ丁	生嶋松郎さん(81歳)	8月20日没
加古川	藤井清光さん(88歳)	8月23日没
姫路	福田茂子さん(89歳)	8月29日没
東ノ丁	柏原健さん(88歳)	8月30日没
東ノ丁	山本龍男さん(84歳)	9月2日没
姫路	野口勝之さん(85歳)	9月7日没
東ノ丁	久保みつ子さん(98歳)	9月12日没
稲美町	梶原絹代さん(94歳)	9月28日没
中ノ丁	寺田正義さん(88歳)	10月11日没
宮本丁	地神末廣さん(83歳)	10月15日没
東ノ丁	濵田玲造さん(89歳)	10月26日没

修繕のご報告

大歳神社に隣接するお寺の北側の墓地の塀を、従来の無機質で圧迫感のあるブロック塀から、明るく解放感のあるフェンス式にしました。



令和6年に法然上人によって浄土宗が開かれて850年の節目を迎えます。本山の永観堂ではただ今、その記念事業の一環として、俳句コンテストを実施しております。審査員はテレビでもご活躍中の夏井いつきさんです。皆様もどうぞ奮って応募下さい。

■募集期間　令和2年12月31日必着
■応募方法　永観堂ホームページまたはチラシのハガキにて
　　※左記のチラシはお寺にも置いています
■審査員　　俳人・夏井いつき氏　永観堂関係者
■入賞発表　令和3年3月中旬
　　永観堂内に掲示及び永観堂ホームページに掲載
■入賞賞品
最優秀賞　1句　旅行券3万円+永観堂拝観ペア招待券
優秀賞　　5句　旅行券1万円+永観堂拝観ペア招待券
特別賞　　3句　管長貌下ご染筆色紙+永観堂拝観ペア招待券
佳　作　100句　永観堂拝観ペア招待券

本山の永観堂は今年も「秋の寺宝展」ならびに夜間の「もみじのライトアップ」を開催致します。今年はコロナ対策で混雑と密を少しでも緩和するため、昼夜間の境内への観光バスの乗り入れが停止されます。「もみじの永観堂」として毎年多くのメディアで連日取り上げられることもあって、11月の勤労感謝の日の3連休をピークに国内外から大勢の方がお越しになります。しかし、今年に関しては外国人観光客と団体旅行の方のお参りが減る分、例年よりは鑑賞しやすくなるかもしれません。尚、期間中、例年青年僧が御影堂でリレー法話を行っており、私も毎年出仕しておりましたが、今年は中止となりました。

除夜の鐘

12月31日（大晦日）午後11時40分頃～

除夜の鐘（除夜会）は懺悔の会です。懺悔とは仏の前で自らの罪を露わにし、悔い改め、許しを請うことです。新たなスタートをきるためには懺悔が欠かせません。今年はコロナに振り回された一年でした。まだまだコロナへの不安は続くと思われますが、徐々に良い方向へ向かうことを願ってやみません。本堂では一年の安泰を祈願する修正会のお勤めをしておりますので、合わせてお参り下さい。